

## 救いを求める信仰共同体の祈り：神が闘われる、応答としての賛美と感謝

まず、詩編 44 編が出来たら朗読して読んでみよう。詩編 42～49 はエルサレム神殿の聖歌隊コラの子ら(ダジャレではありません)の歌である。それゆえ、シオンの山エルサレム神殿中心主義であり、「神」(エル)が専ら登場し、「主」(ヤハウエ)の神名はあまり登場しない。「王」「神よ、あなたこそ私の王。」(5 節 a)と歌う時、安易な「シオニズム」に陥ることに注意せよ！米国の元大統領トランプの背後の武装集団や米国南部バプテストの根本主義者の存在の危険を思うとき、「聖戦」・「聖絶」思想を批判的に避けねばならない。実は、この詩は 10 節以下が示すように「哀歌」(エレミアの「哀歌」参照)なのである。

コロナウイルス感染拡大下、時間も限られ、原典から 44 編を全体的に扱うことは困難なので、1～9 節(丁度セラ 多分、休止の謂)もあるので、9 節で切りたいのです。

### 1. 過去の救済史の記憶

信仰は「聞くこと」から来ると言われ(ローマ 10:11)、キリスト教信仰の場合は「キリストの言葉」に聞くことが基本である。イスラエルの信仰は(キリスト教もそれを継承しているが)、エジプトの奴隷状態からの主なる神による解放、荒野の 40 年、カナンへの徐々になされて行った移住・定着(牧草地・耕地の所有)、そして、出エジプトの出来事から遡って、ヨセフ、ヤコブ、イサク、そしてアブラハムとの約束の物語への遡及し、なんと神による天地万物の創造物語に行き着く。壮大な物語である。

「神よ、我らはこの耳で聞いています」。(2 節 'elohim bə'azənēnū šāma'nū 神よ、私たちの耳で聞いてきました。継続を意味する完了形です) 現在私たちは、何に聴き、何を聞いてきたのでしょうか？ 圧倒的にコロナウイルス感染の恐怖・不安のニュースですか？ 愚かな為政者たちのことですか？ マネーゲームと貧富の差の拡大社会の将来像ですか？ それぞれは多分必要な「情報」でしょう！ しかし、私たちがそれらの「情報」を聞くのは、信仰の父祖たちが('ābōwātēnū) 私たちに告げてきたのは、「あなた」(神)のなされた諸行為であるという文脈においてなのではないでしょうか。

### 2. 信仰告白：カナン定住は神の恵みの業である

歴史的・現象的にはイスラエルは農耕・豊穡神話に満ちたパレスティナ地域の周辺に住み着き、そこに、出エジプトをしたヘブライ人たちが合流し、信仰共同体を形成したと考えられます。(歴史的な推論ゆえ他説あります) それはすでにある田畑に新しい苗を植え付けるようなものであり、先住民の領土に侵食し、奪い取るようなものでした(3 節)。そして、イスラエルの繁栄は土着民に枝が伸び(原文：彼らを投げ出しあるいは拡げだし)、陰を作り、災いを与えるものであったというのです。それにしても恐ろしい内容ではないでしょうか！ 貧しいイスラエルの民はそれなりの努力をし、苦渋も多々経験したことでしょう。土地に根差す農民文化と遊牧民の文化の軋轢もあったことでしょう。(My brother said to his friend, "Takashi is a nomad!" 我が弟はチェコのプラハに行く私たちの安全確保のためプラハ M 商事のトマシュに連絡をしてくれたのですが、「私の兄は遊牧民ですから、あなたを訪

間などしないかも知れない！というのです。何ということでしょう！)。

しかし、イスラエルは自分の剣によって領土を略奪したのでなく、自分の腕力によって勝利をしたのでもないというのです(4節)。神の御手、神の御腕、神の御顔の光がそれをなし、神がそれを望まれたからであるといえます。すると神が望まれたら、私たちは捨てられるでしょうか？そんなことはないでしょう。(ローマ9～11章)

### 3. 神に不正があるのか？

さて、ここからが黙想の中心です。「聖戦」、武力による他民族制圧は正当化されるのでしょうか？現在の米国、イスラエルの行為はそのように見えますし、2000年のキリスト教史は好戦的キリスト教の血の歴史で塗られています。ここで多少、不思議というか心に響くというか、ザラザラするような箇所を引用します。創世記15:13-16によると、アブラハムはむろんのことイスラエルは400年間約束の地を所有できず、異邦の国で寄留者、奴隷の生活を忍ばねばならない。なぜなら、カナン在先住民が滅ぶような罪が極みに達していないからだというのです。むろん、これは歴史を遡及して書かれており、出エジプト12:40には「430年」とあります。いずれにせよ、400年以上待たされたとはすごい歴史観です。木にある日実がなるように、神は働かれるのです。神はイスラエルを救済しますが、公平・正義・憐れみの神でもあるからである。400年待て、今は土着のアモリ人を破滅させる安易な武力行使はもとより、自ら武器をとることを戒めねばならない。同じように印象的な申命記6:10以下を読んでみましょう。有名な「シエマ イスラエル」に続き、「自ら建てたのではない、大きな美しい町々、自ら満たしたのではない、あらゆる財産で満ちた家、自ら掘ったのではない貯水池、自ら植えたのではないぶどう畑とオリーブ畑を得、食べて満足するとき、…主を決して忘れないように注意しなさい」と言われています。

### 4. 神を絶えることなく賛美し、御名に感謝する

イスラエルではなく、異邦の民の罪の極みを待って神は働かれる。信仰者が頼るのは自分の弓、自分の剣ではありません。敵に勝つのは「あなた」として信頼する神なのです。神が働かれるが、安易に神の代理者(agent)になってはなりません。安易に「御名によって」「神によって」と言うてはならないのです。(出20:7「主の名をみだりに唱えてはならない」。マタイ7:21「主よ、主よと言う者が皆、天の国に入るわけではない。」わたしたちを救うのは神であり、あなたやわたしではありません。人はこのような神の前に賛美を歌い、感謝するのです。ローマ8:36に引用されているように、詩編44:22節を先取りすれば、信仰者の生はキリストに信従する「屠られる羊」の生なのです。